魚類養殖技術の交流及び水産物出荷対策の強化（技術交流会）

八重山支庁農林水産課　　糸　数　　正

1. 課題名

魚類養殖技術の交流及び水産物出荷対策の強化

2. 目　的

与那国町漁協はカジキ釣りで知られるように漁船漁業が主体であり、養殖業については、近年、モズク、シャコガイ等について増殖試験を行っている程度である。

しかしながら、今後、沖合型、陸上型の養殖業の伸展の可能性もあり、地元青年部としては技術の習得を目指している。

また、離島（日本の最西端）であるため、生産物の出荷については養殖への取組みと並行して対策を検討する必要があり、既存の出荷方法、形態、経路等を見直さなければならない。

このため、漁業後継者の養殖業に対する考え方、技術等について地域相互間の交流を行い技術、知識の向上を図るため、与那国町漁協青年部代表を先進地に派遣し養殖技術、出荷輸送対策等の交流活動を行う。

3. 交流先

糸満魚市場
糸満水産加工団地入居流通業者
県漁連市場
本部漁協（魚類養殖情報交換会）
羽地漁協大宜味支部
名護漁協

4. 日　程

平成７年３月１日（水）

水産公社にて糸満魚市場開設経緯及び市場流通の実態について情報収集。

水産加工団地にて流通業者が行っている鮮度保持、出荷技術等について情報収集。

平成７年３月２日（木）

県漁連にてセリ状況及びカジキ等の魚価形成の条件等について情報収集。

本部漁協にて魚類養殖情報交換会に出席し、養殖先進漁協と技術、経営等について交流。

平成７年３月３日（金）

今帰仁村湧川にてマダイ、タマンの養殖施設を視察。

塩屋湾にてマダイ、ミドリイガイの養殖施設を視察。

名護市許田にてマダイ、タマンの養殖施設を視察。

5. 参加者

与那国町漁協青年部
　津波古　聡（38）　青年漁業士
　大城　常良（37）　元青年部長
　上原　正且（34）　青年漁業士
　玉城正太郎（30）　現青年部長
与那国町経済課水産係
　大朝　正源（34）
水産業改良普及員
　糸数　　正（41）

6. 交流内容

(1) 水産公社、水産加工団地、県漁連市場

水産公社にて、公社、卸売会社職員から糸満市場開設の経緯、開設後の状況等の説明を受け、市場施設を視察した。この中で、小型のカジキについては与那国の既存の出荷価格より高く出せそうな話等があった。

水産加工団地の新興物産で「サク」に加工された魚、各種活魚等を視察後、与那国での安価な魚

の出荷の可能性等について情報収集したところ、漁獲後の魚体処理（血抜、保冷等）及び出荷方法によっては、出荷が可能であるとの感触を得た。

漁連市場で、仲買（及び出荷人）の案内でカジキ、マグロ、マチその他の出荷状況の説明を受けたが、仲買の身質等の判定の技、セリの緊迫感等を体験した。養殖マダイも出荷されていた。

(2) 魚類養殖情報交換会

魚病対策の基本について、水試の多和田氏より教示いただいた。具体的に対峙していないが、今後の参考として、餌の与え方、防疫対策等の基本的なことについて勉強になった。

香港の活魚事情について新里普及員から、ハタ類を主体に、活魚の流通、業者の態様、沖縄との係わり等について報告があったが、近隣の国（地域？）のパワーに圧倒された。

養殖魚の生産状況について普及所の取りまとめの報告のあと、各地域より現況について次のような報告があった。

糸満　　現在、マダイ15千、タマン10千を養殖中。

与那原　　マダイを15千入れ、現在５百。

本部　　イカダは現在30基。
マダイは昨年の種苗に問題があったため品薄で注文に応じ切れない。
タマンは中間魚で出荷し、現在なし。
アカジンは歩留まりが悪い。

伊江　　マダイを31千入れ歩留り90％で、今日８百出荷（700～750円）。
タマンは15百を本部に出荷（1100円）。
カンパチは13百入れ、現在1.3㎏程度が８百残っている。

今帰仁　　毎年、マダイを８～15千、タマン10千程度入れているが、今年はカンパチをやってみたい。

与那城　　６経営体で、毎年マダイを数千入れている。

中城　　Ｈ５にマダイ３万入れ現在６千残、Ｈ６にはマダイ４万、タマン２万入れ養殖中。新魚種の導入を検討してもらいたい。

伊平屋　　ヒラメを昨年２月からやっている。

その他として、共済事業の説明があった。

(3) 養殖場

昨日来のあいにくの悪天候のため、先方の漁協に御足労願うのはやめ、養殖担当の新里普及員に案内をお願いし、今帰仁（マダイ、タマン）、塩屋（マダイ、ミドリイガイ）、許田（マダイ、タマン）の養殖場を視察した。

7. 所　感

（与那国町漁協青年部）

(1) 水産公社、水産加工団地、県漁連市場

与那国で重要な漁獲物であるカジキのうち、従来安いと思っていたサイズが、現存のルート以外に有利な出荷先がありそうなこと、多獲され二束三文のチョウチンマチ（ハチビキ）等が、時期、鮮度の状況によっては出荷可能であることなど、重要な情報が得られた。これは、現在の漁獲物の出荷体制の見直しもさることながら、今後の与那国での養殖業の導入に当たっても重要であると思われる。

(2) 魚類養殖情報交換会

魚病についての基本的な知識を得ることができたこと、各生産漁協の生産・販売状況等の情報を収集できたことのほか、県内種苗の需給状況も把握できた。

特に、タマン、カンパチ等の県産種苗への期待の大きさ、販売面の問題への取組みの真剣さ、老若が協力してともに養殖に取組む姿勢等が大変印象深かった。

香港の活魚事情報告では、ハタ、ベラ等の天然活魚が多量に輸入され、かなりの高価格で取引きされていること、水洗トイレ用の海水が活魚水槽に使用されていることなどの説明を受け「びっくり」した。

(3) 養殖場

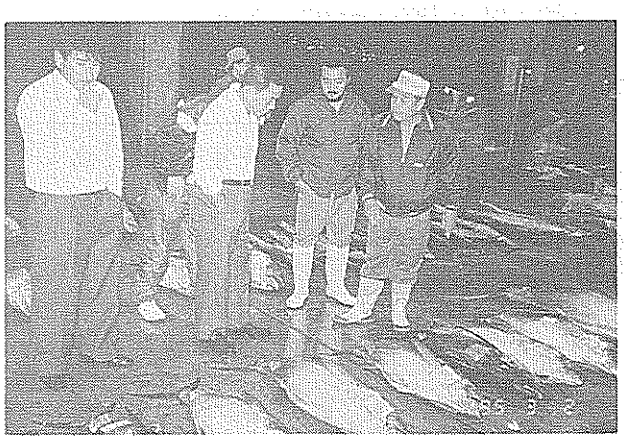
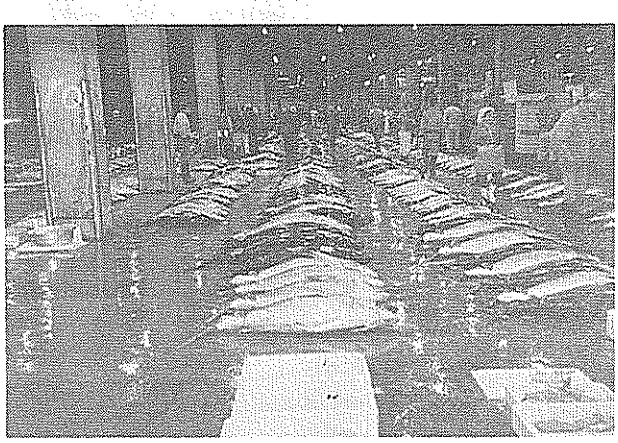
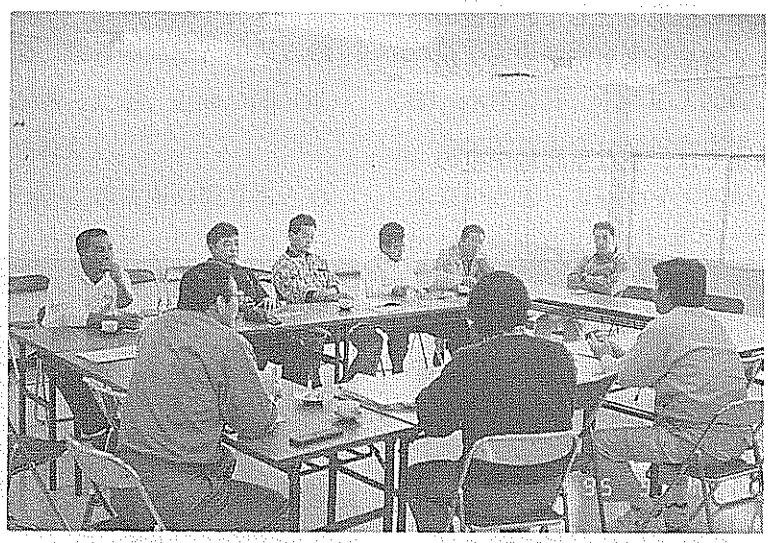
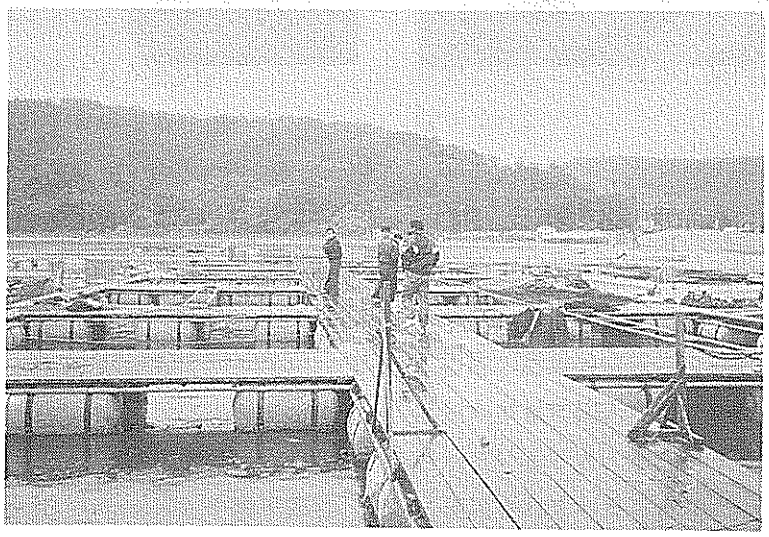
地元ではまだ養殖を行っていないが、今回、魚

類、貝類の生簀、筏等の養殖施設を目の当たりにして大きな手ごたえを感じた。

青年部では、県をはじめ関係機関の指導を仰ぎ、自身の力を集結し、今回の成果を実践に移しながら、活力ある漁村の建設に励みたい。

（普及員）

今回、技術交流事業により、与那国漁協青年部の代表メンバーが「魚類養殖」「出荷対策」を課題として、沖縄本島数箇所で交流の機会をもてたことは、地元にとって大変有意義なことである。

増殖試験程度の段階の青年部であるが、今回見聞した経験は、新たな取り組みとしての養殖業の進展、離島域の流通改革の推進等として、今後の彼らの漁業経営に大きく貢献するものであると思われる。

特に、養殖情報交換会では、主な生産地の生の報告を聞くことができ、大きく触発されたことと思う。また、その後の懇親会では各地の生産者と直接意見交換を行うことができたので、他方面で交流ができたもようである。